「森銑三刈谷の会」だより　No. 23

発行　2023/9/16（月刊・メールでの投稿歓迎）
例会　第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館　参加自由
バックナンバー 刈谷市中央図書館＞森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木　哲 tetsu_s@katch.ne.jp

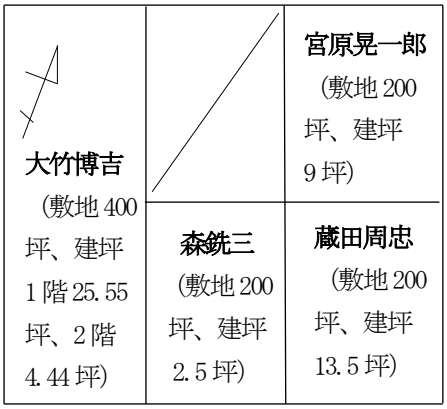

図　1926-1928 年までの二冬を過ごした供養塚 1200 坪の敷地の区分。縦横の比は神谷推定。家はいずれも蔵田設計。大竹はロシア研究家、現岡崎市出身。

第23回（2023/7/15）　「供養塚の二坪半の家」
参加12人　　神谷磨利子

森銑三は 1926 年 3 月文部省図書館講習所（第 5 期生）を卒業するにあたって、東京の西郊・荏原郡駒沢村の供養塚（くようづか）の二百坪の敷地に二坪半の家を建てた。そこから電車を乗り継いで、前年秋に就職が決まっていた本郷の東京帝国大学史料編纂所まで通った。今回の勉強会では、この家にまつわる話を書いた銑三の文章 3 点を読み合わせた。

①「過去を語る」（初出 1954 年、『森銑三著作集』12 巻 p. 396）に短い文章で語られている引っ越しの事情、②「二坪半の家に住んで」（雑誌『建築画報』1926 年 6 月、『森銑三遺珠Ⅱ』pp. 69-75）、③「二坪半の家」（初出 1937 年 6 月、『森銑三著作集』続編 15 巻 pp. 239-242）の三点である。

三畳一間の居間兼書斎に寝台や流し、トイレなど最低必要限の間取りの二坪半の家の設計は、銑三についての勉強を進める中で、会のメンバーにとってはすでにおなじみの蔵田周忠（くらたちかただ）である。互いに 16 歳の時に築地の工手学校予科で同級生であった仲であるが、銑三が重い脚気で帰郷した後も、蔵田は本科に進み、建築家になり、1921 年から分離派建築会の会員になっていた。史料②の『建築画報』には蔵田がスケッチした二坪半の家の平面図と室内図も描かれていて、この供養塚の家が狭いながらも快適な住空間であったことが分かる。銑三は図書館講習所に通いながら、『新愛知』に送り続けた「偉人暦」の原稿料を貯め、この家の建築資金にしている。銑三は郷里の家族に「家屋の所有者」になる喜びを語っていたのであろう。当時東京にいた弟次郎に当てた母の葉書には「兄さんの家越には手つだってやってね。大きな家ができるそうですね」と書かれている。

既に供養塚には蔵田邸と蔵田の妻婦美子の兄・宮原晃一郎邸があり、宮原 44 歳、蔵田・銑三 31 歳の交友関係を楽しんでいる。会では資料として④蔵田「供養塚雑感」（1923『近代的角度』pp. 208-209）⑤宮原「供養塚手記」（初出 1926 年「都新聞」、『感想と表現』）を取り上げ、この田園地帯の暮らしの三者三様の感想を読み比べた。宮原は北欧やロシア文学の翻訳家であり、1920 年 11 月から『赤い鳥』にも童話が掲載されていた。

銑三は供養塚での約二年間の生活の中で、宮原を介し『赤い鳥』や『子供の科学』への掲載をすることになり、蔵田によって後に師となる井上通泰（柳田国男の兄）との縁が出来た。この期間に発表された銑三作品についても順に読み合わせをしていこうということになった。

参考：神谷（2022）宮原晃一郎「虹猫」シリーズの再検討（大阪国際児童文学振興財団『研究紀要』第 35 号）

興味深いお話でした。　　神谷明子

トルストイの「人はどれだけの土地を要するか」という話（注：蔵田が銑三の家を設計する時に思い出したという話）、おもしろかったです。人の一生は何のために働くのか？と思ったこともありますが、終りが近くなってくると「日々が幸せなら」「毎日が平和なら」十分と思えます。たった二坪半の家と思うけど、設計者が苦心されて快適に暮らせるように設けて、軸まで掛けて優雅ですね。ここは今のように暑くなかったでしょうから、自分の空間としてはベストですね。

銑三さんの周りの人々、とても豊かで面白いですね。

資料、興味深く読みました。　　兵藤吾津夫

白眉は二坪半の家、どんな家だろうと読んでいくと、なんと間取りとスケッチまであるではないですか。案内図をしげしげ眺めながら、暮らしぶりを想像しました。

駅から歩いて 15 分で、見渡す限り人家のない虫かごのようなところに建つ小さいながらもお気に入りの一軒家。外から声をかけると、ベッドの四角い窓から顔を出される、というのがいいですね。

でも 200 坪もあると、草取りが大変だろうな、と思っていると、やっぱり雑草の記述もあって、巡り合わせの交友関係の中で青春する銑三さんの楽しげな一面がよく分かる資料でした。

予定

24:2023/9/16（土）山田宇多子　町立刈谷図書館時代の森銑三と子どもたち
25:2023/10/21（土）神谷磨利子『赤い鳥』の森銑三作品